



## イネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率が高い地域があります

### ヒメトビウンカ第二世代幼虫の適期防除に努めましょう

[発令の内容]

作物名 : 水稻

病害虫名 : イネ縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)

発生量 : 多い

発生地域 : 県西地域, 県南の一部地域

[発令の根拠]

- ① 平成 28 年 5 月中～下旬に県西地域, 県南地域の小麦圃場からヒメトビウンカ第一世代幼虫を採集し, イネ縞葉枯ウイルス (以下 RSV) の保毒状況を調査した。その結果, 県西地域の 6 地点中 2 地点および県南地域の 3 地点中 1 地点で, 保毒虫率が 10%以上の高い値となった(表 1)。
- ② 有効積算温度から計算した筑西市の水田におけるヒメトビウンカ第二世代幼虫の孵化最盛期は, 平年より早いと予測される。

表 1 ヒメトビウンカ第一世代幼虫の RSV 保毒虫率

地域	調査地点	RSV保毒虫率 (%) <sup>1)</sup>			
		平成26年	平成27年	平成28年 <sup>2)</sup>	
県西	下妻市	高道祖	—	2.7	9.0
	筑西市	二木成	16.8	8.5	14.4
	桜川市	加茂部	11.9	1.1	3.2
		亀熊	—	—	6.4
	結城市	結城	14.6	8.5	8.5
	八千代町	高崎	—	—	12.8
県南	つくば市	大形	9.3	—	6.4
		上菅間	—	3.2	10.6
	つくばみらい市	市野深	—	—	6.4

1) 平成 26 年はラテックス凝集反応法, 平成 27 年, 28 年は簡易 ELISA 法により検定

2) 採集月日: 平成 28 年 5 月 12, 18, 20, 24 日 検定実施日: 6 月 3 日

サンプル数: 各地点 188 頭

※ —: 未調査

## [病害の特徴]

- ① イネ縞葉枯ウイルスはヒメトビウンカにより媒介される。ヒメトビウンカは、越冬後、麦畑から水田に移動するため、周辺に麦畑がある水田では特に本病が発生しやすい。
- ② 田植えが遅い水田では生育初期のイネが本病に感染するため、被害が大きくなる傾向がある。

(その他、ヒメトビウンカの生態等については、平成 28 年 3 月 22 日発表 病害虫発生予察注意報第 3 号を参照)

## [防除対策]

- ① 昨年、本病の発生が認められた地域で、本年、ヒメトビウンカを対象とした薬剤による育苗箱施薬を行わなかった水田では、表 2 を参考に 6 月第 5 半旬 (21~25 日) 頃にヒメトビウンカ幼虫の防除を行う。

表 2 イネのヒメトビウンカ防除に使用できる主な薬剤 (平成 28 年 6 月 1 日現在)

薬剤名	使用量(10aあたり) または希釈倍数	剤の 使用回数	有効成分名 (有効成分の総使用回数)	系統名	IRAC コード <sup>1)</sup>
スミチオン乳剤	1,000倍	2回以内	MEP(3回以内) <sup>2)</sup>	有機リン	1B
MR.ジョーカーEW	2,000倍	2回以内	シラフルオフェン(2回以内)	ピレスロイド*	3A
アドマイヤー1粒剤	3kg	2回以内	イマダクロプロト*(3回以内) <sup>3)</sup>	ネオニコチノイド*	4A
アドマイヤー水和剤	2,000倍	2回以内			
ダントツ粒剤	3kg	3回以内	クロチアニジン(4回以内) <sup>4)</sup>		
ダントツ水溶剤	4,000倍	3回以内			

1) 殺虫剤抵抗性対策委員会 (IRAC) により、殺虫剤の有効成分を作用機構により分類し、コード化したもの

2) 種もみへの処理は 1 回以内、育苗箱散布は 1 回以内、本田では 2 回以内

3) 種もみへの処理又は移植時までの処理は 1 回以内、本田での散布は 2 回以内

4) 移植時までの処理は 1 回以内、本田での散布、空中散布、無人ヘリ散布は合計 3 回以内

### (注意事項)

- 農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載されている使用方法、注意事項を必ず確認のうえ使用する。
- 表中の記載は、使用方法「散布」の登録内容である。育苗箱施薬を行った場合、有人ヘリ防除または無人ヘリ防除を行う予定がある場合は、本剤の使用回数ならびに有効成分の総使用回数に十分注意する。